

書評

日比嘉高編

『疫病と日本文学』

西原志保

二〇二〇年の初めに始まった新型コロナウイルスによる感染症の流行は、私たちの生活を大きく変えた。人が同じ場所に集まり、直接会話することが難しくなる中、大学や研究の場では、オンラインでの授業や学会が行われるようになった。また同時に、日本文学にかかわる場でも、疫病や感染症がテーマに取り上げられるようになった。本書もそのような試みのひとつであり、「日本文学の描いた疫病と、その渦中に生きた人々のようすを、中古から現代に至る千年のスパンで見渡す」(二二頁)ものである。二〇二〇年二月にオンラインで開催された、名古屋大学国語国文学会令和二年(二〇二〇)度大会シンポジウムをもとにした論考「人喰い鬼と疫病神」「コロナとコロナ」「王朝文学における疫病」に、新たな論考とコラムを加えたものであるという。本書を通し、中古から現代まで、疫病に対する人々の変わらないありよ

うと、その一方で変わるものや、疫病ごとの違いを読み取ることができる。以下に、内容を紹介する。

前半部「疫病の今をよむ」には、主に現在の新型コロナウイルスによる感染症流行にかかわる、三本の論考と三本のコラムを収める。

日比嘉高「パンデミック小説の地図を書く」は、「日本の作家の作品を中心に、〈コロナ禍の文学〉が語る想像力」(二五頁)について考察する論考である。「ウイルス起源の感染症の爆発的拡大」に、人類はたびたび見舞われてきたが(一四頁)、ウイルスとヒトとの「結びあい」や、「とりまく環境、技術、習慣、感性など」複合的な要素によって決まるため、それらが「時代とともに移り変わっている」以上、ウイルスとの「共生のかたちは新しくならざるをえない」(一五頁)。そのため、「これまでに発表された主立ったパンデミック小説」を、「シミュ

レータ指向」と、「非現実指向」の二つの軸によって「マッピング」したうえで、「コロナ禍を描く現代日本の文学作品を検討」（一六頁）する。例えば、「D A P P I」という略称を持つ正体不明の病気が広がっている世界」（二二頁）を描く小林エリカ「脱皮」について、「コロナ禍以前から響いていた、私たちの社会の重苦しい旋律」（二四頁）を指摘し、「新型コロナナウイルスが蔓延している東京とその近郊を舞台とし」、「生きづらさを抱えた」「恋人ふたり」を描く金原ひとみ「アンソーシャル デイスタンス」について、「世間」の息苦しさ、生きにくさを「ウイルス」が「あからさまにさらして見せただけ」（二六頁）と指摘する。そして、「小説は現実の反映でもなければ、出来事の後追いでもなく、「進行する現在の只中で、人々の揺れ動く感情の制御や、ビジョンの獲得」などのために「機能し」、「自ら現実を形づくる一部」となっていく」ありさまが、「コロナ禍のパンデミック小説から見えてくる」（二九頁）と結論づける。

飯田祐子「生き延びていくために―金原ひとみ「アンソーシャル デイスタンス」と「腹を空かせた勇者ども」は、「パンデミック小説の地図を書く」でもとり上げられていた「アンソーシャル デイスタンス」および、「腹を空かせた勇者ども」について考察するコラムであ

る。「コロナによってもたらされた生活を生き延びていく」ためには「支え合う関係」が必要（四二頁）であるが、そのために「アンソーシャル デイスタンス」は「家族」というナラティブに引き寄せられていき（三九頁）、一方で「腹を空かせた勇者ども」では、同じ学校の友人やバイト仲間との「家族」ではない連帯（四〇頁）が描かれるのだという。

おそらく、疫病が流行しようとしまいと、「家族」があるうとなかろうと、生き延びるために「支え合う関係」は必要だと思うが、コロナ禍によってより明確になったということだろう。評者の個人的な話で恐縮だが、結婚相手も子供も不要だが犬と一緒に暮らしたい人間である私にとって、それが可能な共生のかたちをどのようにつくってゆくのが、十何年来の課題である。一人暮らしでは十分に面倒を見ることができず、何かあったときのことを考えれば、「支え合う」人間の相手が必要となるからである。保護活動者として里親探しをする側の立場から考えてみても、（愛情や相性、動物医療に関する理解やそれにかかわる金銭的余裕などのほかに）一人暮らしは不安、子育て世代も多忙であり、子供との相性も難しく、高齢者は寿命を考えると渡せないとなると、安心して犬や猫を託せる里親さんは本当に限られてくる。

現在の家族のあり方が、共生のかたちとしては既に無効になっていくということでもあろう。

藤田祐史「俳句と疫病―コレラとコロナウイルスの句を読む」は、「新型コロナウイルス感染症の流行している現在（令和三年一月）の時点から、明治以降のコレラに関する俳句を読みなおし、俳句と疫病の関係についての理解を深める」（四四頁）論考である。「俳句がコレラを巡り来る「季」として捉えてきた」（五四頁）ことを確認したうえで、そのような作法とは別に、「俳句の要である季語を媒介にして疫病と関わらんとする姿勢」があり、それが現代の「新型コロナウイルス感染症」にかかわる「俳人たちの事績にも通底している」（五八頁）ことを指摘する。それほどまでに「季語」が重要なのは、「くり返し俳句に使用されてきた過去」（六六頁）があるためであり、「過去を思つて今と向き合い、今と向き合つて過去を思う」という往還こそが俳句という文芸の生命（六七頁）であるという。そして、「古人・仲間の宿る「季」と共に今を感受するという俳句の流儀」で、「コロナウイルス」の「厄災と対峙してみる」（六九頁）ことを提案して結ばれる。

宮地朝子「疫病と日本語」は、「新型コロナウイルスの流行」による変化が、日本語に現れた影響について考察するコ

ラムである。まず、「疫病とその対策や影響にまつわる特徴的な語や表現」（七二頁）をいくつかあげ、特に、「対面授業」（対面○○）という表現に注目する。「対面対話」においては、「音声」を用い、「話し手と聞き手が生身の身体で対面し、コミュニケーションの時間と場を共有する」などの条件が、「話し言葉」を特徴づける（七五頁）が、一方で文字を媒介とするのが「書き言葉」であり、「知識や情報の記録・伝達」を目的とするために「正確性や再現性を要する」（七五頁）。そして、携帯電話やスマホの発達によって登場してきたのが、「仲間内や特定の相手とのやりとりが中心であり「話し言葉」に近い様相も示すが、文字だからこそその表記上の工夫や遊びに富む「打ち言葉」である（七七頁）。「打ち言葉」の独自性を支える」のが、「オンラインコミュニケーションの持つ「遠隔」という条件」（七七頁）であり、「打ち言葉」を第三の極に押し上げたのは、疫病の流行という、人間には制御不可能な偶然の災禍であった」（七九頁）のだという。

高木信「鬼はそこにいる、しかしそれは偏在する―疫病とエクリチュールと」は、新型コロナウイルスにかかわる言説を（怨霊）の比喩で考察したうえで、日本文学における疫病神としての「鬼」に注目する論考

である。特に酒吞童子に注目し、鬼と英雄とが「紙二重の存在」であること、寝ているところを襲うという「横道」によって人間たちが酒吞童子を退治することから、「鬼の方が（人間）的であるという逆説」（二〇二頁）を指摘する。「鬼」は、（人間）たちが自分たちの生活空間を維持（納得）するために必要とされる」（一〇一〜一〇二頁）が、「鬼」が「怨霊」化」（一〇二頁）することを避け、「戦争」というメタファーから逃走＝闘争する」ためには、「われわれ」が「鬼」そしてウイルスへと「生成変化」し、「ウイルスは、われわれへと生成変化」（一〇三頁）しなければならぬのだという。

尹芷汐「隠喩としての「戦争」、隠喩としての「埋葬」——閻連科と方方の文学から疫病を考える」は、「鬼は、そこにいる、しかし、それは偏在する」でも触れられていた、「戦争」というメタファーに着目し、閻連科と方方の作品を考察するコラムである。閻連科による「アウシュビッツ」や「戦争」に喩える比喩および、それに対する古谷田奈月の批判について、「アウシュビッツ」という比喩が正当化できるわけではない」（一〇九頁）、「疫病を「戦争」に譬えることへの違和感や、よって戦争そのものに鈍感になってしまふことへの危惧」につい

て「賛同する」としながらも、「戦争」の比喩が喚起する情動の差異」（二一〇頁）をていねいに辿り、「疫病を論じる時について戦争の話が引き出されるのは、「人間と集団との関係はどうあるべきか」という根本的な問いがそこに横たわっているから」（一一一〜一二二頁）だというのである。

後半部「疫病をふりかえる」には、中古から近代までの疫病流行をふりかえる論考四本とコラム二本を収める。

島村輝「人喰い鬼と疫病神——「大正」を襲った「流行感冒」は、「鬼は、そこ」にいる、しかし、それは偏在する」でも触れられていた、「疫病神」と「鬼」に注目し、「宮沢賢治と志賀直哉」の「スペイン風邪」をめぐる営みについて考察」（一四〇頁）する論考である。

「今日のコロナ禍のもとにあつて」「ブームを巻き起こしている」、コミックス／アニメ作品「鬼滅の刃」が「大正」時代を背景に「人喰い鬼」退治をテーマ」とすることから、「スペイン風邪」が流行した二〇〇年前の「大正」時代の文化的表象と、「新型コロナナウイルス」が拡大する現代の文化的表象とを、二重写しにして読み取る」（一二三頁）。宮沢賢治に関しては、「血液感染」による「感染症」＝比喩としての「鬼」や「兄妹の絆」による力の發揮」（一二二頁）について、志賀直哉に関しては、「流

行感冒」をとりあげ、「文明化する当時の言説空間」に現れる「民俗的「疫病神」」（一三三頁）の姿に注目する。

柿原千鶴「伝記にみる医師とコレラ」は、いくつかの伝記や自伝、伝記小説から、幕末のコレラ流行への医師たちの向き合い方を考察するコラムである。慶應元年（一八六五）医師の子として生まれた富士川游が「医学と歴史を結びつけようとした」『日本疫病史』（一四五頁）、森鷗外『洪江抽齋』、鶴見祐輔『後藤新平』などに触れ、『後藤新平』で描かれる「凱旋兵への疫病対策」（一四九頁）について「資料を通して検疫事業の歴史的意義と、そこにたしかに与した人間たちを描く」（一五四頁）と述べる。

中根千絵「中世説話の「心」をもつ病―『今昔物語集』を中心に」は、日本中世の説話における、病をもたらし「疫神および疫鬼」と「他人にうつることのない「寸白」（サナダムシ。寄生虫の一種）という病の視覚化」（一五五頁）について考察する論考である。説話における、「疫神の正体、姿形を明らかにし、その言葉を聞き取る」姿勢の背景に「中世の人の認識内に病の正体が「こころ」をもつという大前提があり、それゆえに「対話が可能」「対処可能」（一八〇頁）であると理解されていたのだと指摘する。その上で、現代のコロナ禍における「ウイ

ルスとの共生」という物言いは、病の撲滅をはかるのではなく、病と折り合いをつけながら生きてきた日本の中世の人々と似通う発想の上に成り立っている」（一八〇―一八一頁）と結論づける。なお、病が虫として表象されることは、「パンデミック小説の地図を書く」でも触れられていた小林エリカの現代小説「脱皮」とも共通するようで面白い。

近本謙介「疫病を表象する信仰の文学瞥見」は、「疫病と神・仏への信仰」（一八五頁）に関するコラムである。『日本書紀』『古事記』、『今昔物語集』、『春日権現験記絵』などをとりあげ、さまざまな行疫神のありようを考察し、「行疫神の多様性は、あたかも現代では変異株という名ですがたを変えていくウィルスと向き合ってきた歴史を象るもの」と指摘する。そして、「礼節をわきまえた」行疫神ばかりではないが、「せめて蓄えられた叡智と経験値を動員して、過去の人々が乗り越えてきたように眼前の状況に応じていきたいもの」（一九二頁）と述べる。

塩村耕「コロナとコロリー幕末の江戸災厄体験記の奇書『後昔安全録』とその著者について」は、「江戸に住む一人の町人が、安政から文久にかけて起きた変災をくぐり抜けた見聞体験を書き綴った」（一九五頁）、西尾市

岩瀬文庫所蔵の書である『後昔安全録』に関する論考である。前半では『後昔安全録』における安政五年～六年の「コロリ」(コレラ)流行の記録を紹介する。記述は「その時々起きた出来事を、見聞や体験に従い、ほとんどそのままに」書く、「冗長で読みにくい」(二〇〇頁)ものだが、「身を任せて読み進めるうちに、あたかも自分がそれを追体験しているような」感覚になる(二〇〇～二〇一頁)。「葬式の棺桶、何れの火屋にも門内より裏の方に至るまで、山の如く積重ね」(二〇一頁)とある、「火屋(火葬場)の描写が凄まじい」(二〇二頁)。また、「虚実を問わず、巷説の類がこれでもかというほど収められており」、現代のコロナに関しても「どのような風説が流布するかを考える上で参考となる」(一九九頁)。後半では著者である「真木酒家」がどのような人物であったのかを、懇意にしている書肆、同じ名前による著書、寺子屋を営んでいたということなどから探つてゆく。そして、「東京府の寺子屋一覽表」に載る「文敬堂」の塾長「内埜(野)喜三郎」(二〇八頁)であり、「江戸期の女訓書を集成した」かのような「懇切な造りの女子用往来物」(二二一頁)である『女訓手習鏡』の著者である、内野善邦という人物であることを突き止めてゆく。

大井田晴彦「王朝文学における疫病」は、『大鏡』や

『蜻蛉日記』、『枕草子』や『源氏物語』など王朝文学における疫病の描写について考察する論考である。まず「王朝文化の最盛期である一〇世紀末から一一世紀初頭は、疫病が猛威を振るった時期」(二一四頁)であったことを確認したうえで、『枕草子』に関しては、美的に描かれる病氣と、「黙して語らない病氣」(二二二頁)に注目する。「主家没落の原因となった道隆の「飲水病」(糖尿病)や「政局を大きく揺るがした長徳元年の疫病の記憶が強烈」であるために、「主家衰退の悲哀は描かず、明るく美しい側面を強調して語る『枕草子』の性格」から、「これらの病氣」は「語られない」(二二五頁)のだという。『源氏物語』に関しては、夕顔巻のものけと病について「若さゆえの軽々しい振る舞いが、源氏を重病にし」「夕顔を死に至らしめた」(二三三頁)、若紫巻と賢木巻の「瘧病」(マラリヤ)について、「光源氏の死(と再生)の物語の序章」としてある(二四〇頁)と指摘する。

本書から(懐かしく)感じたのが、評者が大学院博士課程前期課程で学んでいた頃にはまだ残っていた、日本文学や日本語学、日本文化学や比較日文学の大学院生がともに同じ授業に参加していた雰囲気だ。今も複数の研究室の大学院生が発表する演習が残っているかどうかは

わからないが、「あとがき」にもあるとおり、名古屋大学国語国文学会はまた「分野や時代の異なる研究者で構成され」ており、「時代横断的なテーマを追えるという利点がある」(二四三頁)のだろう。近年、分野横断的、学際的な研究の必要性が主張されることが多く、また疫病のようなテーマは、細分化された分野のなかだけで考察できるものではない。本書の成果は、研究分野が時代ごと、ジャンルごとに細分化されていくなかで、むかしから変わらないかたちを保っている学内学会が、逆に新しい学際的な研究の足場となる可能性を示唆するものであると思う。

二〇二二年七月一日刊、三弥井書店、四六版、二五四頁、

二五〇〇円＋税

(にしはら・しほ／前橋国際大学・大東文化大学等非常勤講師)